

Newsletter

SEPTEMBER 2001

http://www.aack.or.jp

目次

紀行 崑崙山脈六五四〇メートル の未踏峰登頂記	田中昌二郎	1
「西大嶺」登山記 「追記」 森本陸世氏との最後の山行	沖津文雄	10
山岳研究 教育的登山論シリーズ 第四章 山歩きの服装	中島道郎	12
特別寄稿 森本陸世君の死に関連して、 同行諸君への手紙	斎藤惇生	14
山岳部創世記 京大山岳部の創世	藤平正夫	15
京大山岳部時代を思いでのままに	舟橋明賢	15
山岳部に入った頃	川口章	17
京大山岳部創立の頃		20
お知らせ		20
著書紹介		22
行事カレンダー		23
編集後記		23

崑崙山脈六五四〇メートルの未踏峰登頂記

田中 昌二郎

いささか旧聞に属しますが、二〇〇〇年八月に京都北山の会（京都一中、鴨沂、洛北高校山岳部OB親睦会）の登山計画に参加しました。北山、美濃の山や谷を踏破していた若者が、卒業後それぞれの道を歩み今やっと自由な時間を得た。長年心の奥に隠れていた「ヒマラヤ」、「崑崙」が頭をもたげて来て、京都一中創立百三十周年、京都一中、鴨沂、洛北高校山岳部創立八十五周年を期に登山計画が企画されました。高齡、素人の手作り登山隊でありましたが、幸運にも目標を達することが出来ました。ここにその概要をご報告いたします。

崑崙登山計画

一. 目標

当初ネパールヒマラヤ、カンチエンゲンガ西方の未踏峰P六〇〇メートルを目指しネパール当局と折衝したが果たさず、方向転換し一九九九年秋、崑崙山脈に三名の偵察隊を派遣し、カシユガル登山協会、ウルムチの旅行社等の協力を得て、新

疆ウイグル自治区、新蔵公路・奇台達坂の東方、旧ソ連製一〇万分の一地図によると、北緯三五度四八分五六秒、東経七九度三五分四〇秒に位置する六五一一メートルの未踏峰の初登頂を狙うこととなった。

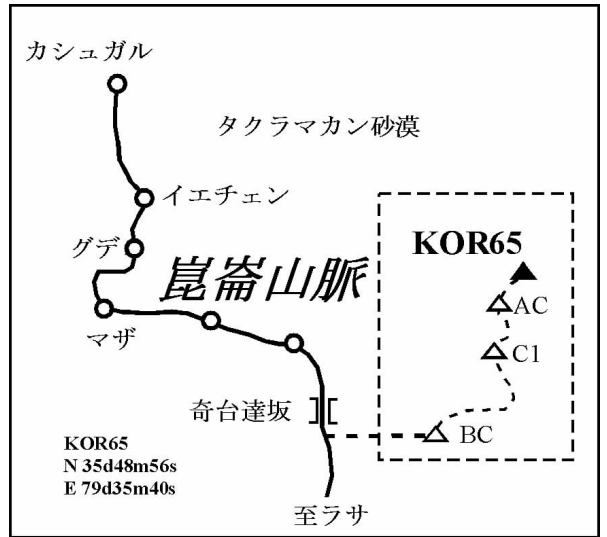
この山は偶然にも一九八八年京大崑崙学術登山隊が、甜水海から崑崙の山を写したカラー写真（AACK時報 No十一報告書に掲載）中央やや左に写っている雪峰だった。

二. 隊の構成

総隊長 川喜田二郎（京一中昭和十二年卒）国内にて指揮

隊長および隊員十三名、平均年齢六三・五歳（最高齡者 七一歳 最若年齡者 五五歳）

学校卒業後も山を登り続けている者、全く登っていない者、三、四年前から再開した者など山暦、経験、体力はまちまちである。参加の意思のあるもの全て受容られた。個人の意志によりBCにずっと留まり、食事に腕を揮う隊員もあった。高齡隊のため隊員の健康面が心配されたが、一中卒の先輩医師が参加して頂いたので心強かった。他にテレビクルー三名、他一名 計十七名の大所帯となった。



三、準備作業、訓練山行
 一九九九年十二月から毎月、隊員の会社会議室にてミーティングを行い、分担した各役割の準備進行状況を検討しあった。

各個人の自主トレーニングの上に、二月八ク岳漏斗沢にて氷雪訓練、五月千疊敷カールにて雪上訓練と氷河上の危険についての実例レクチャー、立山登山、インドアー講習会、七月富士山登山を行い技術の習得に努めると共に、京大崑崙隊の能田隊長（北山の会会員）から崑崙について、斉藤淳生ドクターからは高度障害、高所医学、医薬の進歩について、JAC京都支部の故須藤建志氏からは豊富な高所での経験を基に高度障害の発見、克服の方法、予防について実例を挙げてレクチ

ヤー頂いた。頂いたアドバイスがこの高齢隊にどんなに役立ったことか、ここに改めて感謝の意を表わす次第です。

航空便利用のため出来るだけ日本から持出す荷物の重量を抑えたかったが、十七名の登山装備、高地での食料、医療用品、報道機材等の総量は約一・二トンとなった。その約半量を航空貨物として先行して七月八日にウルムチの旅行社宛に発送し、陸路カシュガル登山協会の倉庫へデポし、残りを隊員手荷物として七月二十四日同便で持ち込んだ。キャラバン及びBCでのテント、炊事用具、燃料、食料、医療用酸素ボンベ等は現地旅行社に準備願った。

四、行動概要

七月二十四日 関空をJAS便にて西安、国内便にてウルムチ、二十五日 カシュガル到着

七月二十六日 登山協会倉庫にて装備、食料等検収の上積み込み作業後市内観光

七月二十七日 キャラバン開始、ランクル六台、トラック一台、イエチエン登山協会招待所泊

七月二十八日 アカズ峠越え（三五〇〇メートル）、テント泊、二十九日セラク峠越え（四九五〇メートル）、テント泊

七月三十日、三十一日 BC地点偵察（往復）、他は高度順応、休養、五〇九道班泊

八月一日 奇台達坂（五三三四メートル）を越え、オフロードの谷を約一〇キロメー

トル遊り、標高五二四〇メートルにBC設置
 八月二日、三日 休養日、一部は上部ルートおよびC1地点偵察

八月四日 高度順応、荷揚げを始める、
 八月五日 C1設置（五七二〇メートル）
 テント二張、順次荷揚げと上部氷河ルート偵察を行う

八月九日 全員BCにて休養
 八月十日 アタックシリーズ開始、C1を氷河の取り付き地点（五八〇〇メートル）に移設

八月十二日 アタック隊がAC設置（六一〇〇メートル）、泊
 八月十三日 未踏峰登頂（六五四〇）約二二時間二〇分後AC帰着、泊
 八月十四日からAC 撤収、C1 撤収、

八月十七日 BC 撤収
 八月十九日 カシュガル帰着、カラクリ湖遠足など観光、滞在
 八月二十五日から九月一日にかけて順次帰国

（注）「KOR六五」は目標の六五一一メートル峰に付けた仮称である。登頂時GPSで測定したところ六五四〇メートルを記録した。

八月一日 予定通りBC設置完了。心配していたセラク峠も無事越えられたが、トラックが谷の増水でスタックし、軍のタンク車に引き上げられる危ない場面もあった。大雨で数日間通行止めになっていた新蔵公路が、軍

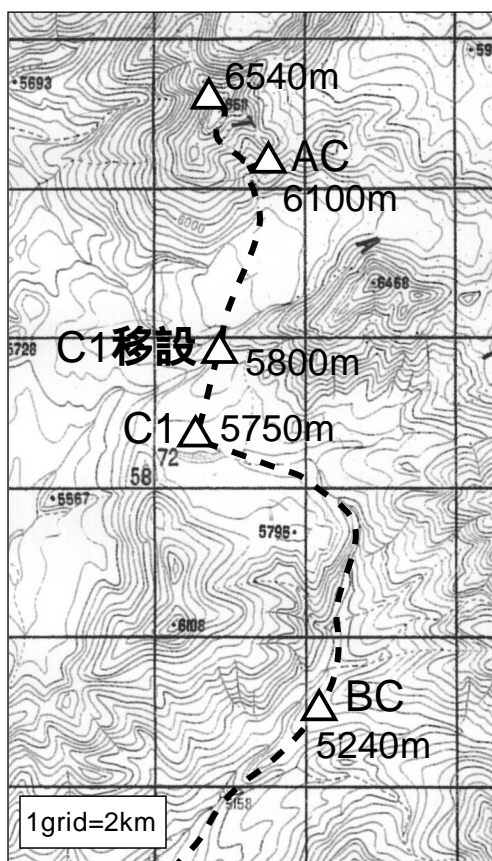
道班の復旧作業で仮説道路が出来上がり、我々は一番に通過出来るなどラッキーにも恵まれた。荒涼たる砂地の丘のサイトであるではあるが、炊事用の水もすぐ近くに得られるのがいい。

八月三日 朝食前の測定値、心拍数 八四、SPO二 八三、血圧一五〇/一〇〇。キャラパン出発以来全員、毎朝夕、体温、血圧、血中酸素濃度と心拍数を測定し、測定表をドクターに提出し、健康管理を願うことになっている。寒い食堂テントで肩脱ぎになって計った所為か、高度の所為か、こんなに高い血圧の数値に驚く。

今日も休養と考えていたがあまりに天気がよいので、急遽上部ルート及びC1地点の偵察に四名が出ることにする。九時五十分出発。BCから谷を飛び石で渡り、初めての高度での焦りは禁物と、ゆっくりゆっくり広い谷の砂地を踏みしめて進む。先は長い、三〇分ピッチで慎重に歩く。十一時五十分 ガレ谷の取付点到着、標高五四八メートル。双眼鏡で見たときは急峻な穂高の岩壁の様に見える心配したが、目の前でよくよく見ると谷そのものの傾斜は緩く、大きな岩の重なった少し不気味なガレ谷であり、両岸上部の落石さえ気を付ければ容易に通過できる状態であった。フィックスザイルも用意したが不要。これで第一関門は突破したも同然だ。十二時出発。右岸の岩壁の上部には大きな岩が微妙なバランスで静止している。雨や雪が降ったりすると、動き出しそうで不気味であるが、

今のところ天気も良くそんな兆候はない。予想したほど浮き石はないが、落石などという“どんくさい”事をしない様に、意識的に大きく腹式呼吸をしながら慎重に登る。傾斜は立山雷鳥沢位で、谷の中央部で一ピッチして更にひと頑張り。十二時五十分 谷を抜け上部高原に到達、標高五六六〇メートル。BCと交信。やれやれ、第一関門通過と、例によって水を努めて大量にのみ少しエネルギー補給し、標識の赤旗を立てる。

十三時二十一分 傾斜も急に緩くなり、上部の高原に入った。徐々に両岸も開けて来、長方形の褐色スレート瓦のような岩を踏んで進んだ。いよいよ未踏の領域に入ったと思うと、嬉しさがこみ上げてくる。しかしなんと荒涼としている事か！一片の緑もない灰色と褐色の世界を黙々と進む。京都でのルート検討の時、この辺りはひよっとしたら氷河から流れてくる水の広い遊水地になっていて、足がズブズブ潜るような湿地帯なのではないかと心配していたが、杞憂に終わり第二関門も無事通過した。進むうちに谷の中央部も砂地に変わり、水流も見えて来た。左岸の尾根が大きく右岸近くまで一杯にまで張り



出しているの、なかなか谷の奥、目標のピークが見通せない。気は急ぐが高度も高度なので急げない。しんどい。第一の試練か。やっと右尾根末端に登り切ると、正面に真っ白な氷河末端が見えた。もう一息だ。又黙々とほとんど平坦に見える砂地を登る。十四時三十五分 五七三〇メートル地点で谷右奥に、目指す峰六五一一メートル峰が姿を現した。凄い。純白の台形が青空に聳えている。偵察の写真で見えなかった本峰の奥もよく見える。頂上部は手前より奥の方が少し高い台形だったのだ。いっせいにカメラのシャッターを切る。大きく、遠い。皆しばし見とれていたが、気を取り直し更に氷河舌端部目指して進む。少し湿ったボコボコした砂地を蹠（つ）りながら登るが、高度の影響が出てきてしんどくなつてつい立ち止まり休んでしまふ。先

行の二人は氷河の手前に盛り上がりつつあるモレーンに取り付いて右左の斜面を探っていたが、簡単には乗越しのルートは見つからない様で、引き返して来る。本日の最高到達地点は高度五七六〇メートル。

十五時 モレーンの近くには水場が見つからないので、少し氷河まで距離はあるが上部高原西方の淡水湖畔をC1サイトと決定する。標高五七五〇メートル。水深は浅く水汲みには少々注意は要るが、平坦な地形でテントの設営には最適。一応所期の目的を達成したので気分も軽く、ルートをショートカットし赤旗を立てながら降る。しかし初めての高度の影響は隠しようもなく、人によつては少しよれながらの下降でもあった。

十八時二十一分 B C 帰着。偵察結果報告。山の簡単なスケッチを見せながら今日初めてお目にかかった核心部の報告に熱が入る。報道班のビデオカメラのモニター映像に皆食い入るように入っている。

夕食後測定、体温三七・三度、血圧一四八/九五、心拍数一一二、SPO二 七五。やはり疲れているのかSPO二値が下がっている。

八月四日 荷揚げ。現地旅行社の五人も積極的に荷揚げに協力してくれる。B C では当番が献立表に従いオリジナル料理に取り組んでいる。標高五千メートルを超えた高地ではお湯を沸かすにも圧力鍋を使うのを知った。圧力鍋の使い方に慣れず、満足な米の飯がなかなか炊けない。

八月五日 晴。休養。夕食後測定。心拍数七四、SPO二 八四。完璧に戻っている。やっぱり休養はええ。B C は午前中ボカボカとした陽気で天国なのだが、午後三時を過ぎると猛烈な砂嵐の定期便が襲ってきて地獄に変わる。激しいところだ。C1が出来た。テント二張。

上部偵察

八月六日 晴後曇り。心拍数 八八、SPO二 八三。休養の効果があった。

今日はいよいよC1へ上がり一泊し、翌日高度順応も兼ねて上部氷河からA C 地点偵察に向う。メンバーは四名。C1宿泊者は必ずA 一食を持ち、非常食を必ず携行する事、行動食と充分な量のミネラルウォーター（平均一Lから一・五L）を忘れず持つ事と食糧係から注意があった。

C1到着後モレーンの乗越しルートの偵察に出かける。モレーン部はなだらかな岩屑の岡になっているのではと想像していたが、全然違って大きな岩石がうねり、谷は深く手強い。急なモレーンの尾根をジグザグに登り、大きな岩の折り重なった谷を左側へトラバースし大きくうねる岩尾根を巻けば氷河に出られそう。

二張の新調のエスパースタントは、内張りも真つ白だし居住性も良く全く快適で、現地旅行社が用意した天津製の風の吹き込むB C テントと比べると、天と地の差だ。E P I ストープも快適に燃える。しかもボンベとバー



河上から目標のピークを望む

ナーがセバレートされたタイプで炊事の際安定性も良い。スूप、アルファライズ、フリーズドライのおかず、これも言う事無し。

食後にお茶、紅茶など水分を充分とって、日課の測定をする。心拍数 八八、SPO二七七。シユラフに入ったことは覚えていたが後の記憶なし。快眠の模様。

八月七日 晴後曇り後曇り風雪。心拍数九二、SPO二七九。

今日はいよいよ氷河横断ルートを確定し、AC地点を偵察し装備を荷揚げする重要な一日である。荷揚げ装備を担ぎモレーンを昨日下見したルートで乗越し、待望の氷河に降り立つ。いよいよ氷河の横断だ。アイゼンを付け、アンザイレンすると身が引き締まってくる。取付きは注意を要するので、セカンドの確保を受けながら一步一步確かめつつ進む。ヒドンクレパスの危険性については十分レクチャーを受けていたので、臆病なくらい慎重に進んだ。氷河上の積雪は約二十センチ程あり、踝あたりまでのラッセルでボコボコもぐる。おまけに好天で気温も上がりアイゼンの下で雪が団子になり、二、三歩行つては立ち止まり、ピッケルで団子を落とさねばならないので消耗する。氷河は地図のとおりというかそれ以上に傾斜が無く、緩い起伏を描きながら分水嶺へと伸び広がっている。標識の赤旗を多く立てながら進む。平坦な広い氷河なので迷わないように、旗竿六十本、赤旗六十枚

赤い布袋十数枚、赤色カラーズブレイ一個を用意してきた。初めはピッケルで旗竿を立てる穴を掘ろうとしたが、氷が硬くてピッケルが跳ね飛ばされる。雪の下に横たわる「本物の氷河の水」は、透明でカンカンに硬い。それではとアイスパイルを懸命に打ち下ろすが、ほんの上皮を削るだけで、充分な穴を掘る事が出来ない。何度も穴掘り作業に息を切らし、ハー、ハーといつて雪の上に倒れていたが、これでは能率が悪すぎる。ハーネスに提げているアイススクリュウの事を思い出しトライしてみると、それもその筈、鋭利なスクリュウが見事に氷を削つて、旗竿に丁度の穴が掘れた。これに高度六千メートル近くでの非人間的な労働から開放され、赤旗が白い氷河上に順調に次々に立った。氷河対岸の二つの黒いガレ

尾根の間の真つ白な大きなルンゼを目標に進む。疲れるとザツクの上に腰を下ろしたり、仰向けに寝転んだりして一息入れながらルートの検討をする。京都での検討時には、このルンゼが登攀ルートの第一候補に上がっていたが、傾斜はかなり急に見える。だが危険なほどではなく使えそうだ。そして六五—メートル峰南西尾根の雪の側面も十分安全に登攀可能に見える。雪崩や深いラッセルを避けるために、最初は左ヘトラパーヌ気味に登り、風が強いのか雪がつかずに所どころ岩屑の露出している辺りを登つて尾根に取付き、後は尾根通しに頂上へと一応ルートは描けた。AC(アタック

キャンブ)の位置は出来るだけ上に上げた。白いルンゼを二百メートルほど上がった右の尾根に、傾斜が緩んだテラスがある。あそこにテントが張れるだろう。ルートの目途が立つと又新たな登高意欲が湧いてきて、つらいラッセルを続けるが、幅約1キロの氷河にてこずる。

十五時 とうとう雪も舞い出し、風も強く吹き降ろして視界も利かなくなってきた。氷河上にスノーバーを二本、三本と打ち込み、AC用装備をシュリンケや補助ザイルで固定してデボし、引き返す事にした。やはりアイゼンに引付く雪の団子に悩ませられながら、よたよたと氷河を下る。モレーンに着く頃から風雪は更にきつくなってきたので、ルートを間違いやすいトラパーヌの箇所目標を付けながらC1へと下つた。C1に上がつて来ていたB隊にモレーン乗越しのルート略図を渡し、A隊は風雪の強くなり出した中を急ぎBCへ降りた。

夕食後測定、心拍数 一一四、SPO二七五。初めての高度でのアルパイトの結果か。

八月八日 休養日。朝食後測定。心拍数八四、SPO二七九と戻っている。やはりBCはええ。血圧一三三/九二。

八月九日 全員休養日。登頂作戦会議。ドクターの高度馴化評価を参考に、本人の意欲を最大限に尊重してアタックメンバーを決めた。A隊四名、B隊三名サポート一名、A隊が先行しルート工作、AC設置し

B隊と合流してアタックすることとなった。

八月十日 六時起床、SPO二 八一、二日間の完全休養で疲労も回復したのか調子は悪くない。心拍数は九三、これは何か？

快晴。七時 食事、隊員に見送られ登頂A隊の四名がBを八時に出発、いよいよ登頂シリーズ開始だ。通い慣れた平坦な谷を最短距離をとって進む。もう三往復もしているのと高度順応のおかげで、ガレ谷もなんなく登って上部高原を進み、C1に到着。先ず手始めにC1移設を行う。氷河の手前大きなモレーンのうねりの後ろに氷河の溶けた水をたえた池が見つかったので、C1をそこに移設する事に決まったので、テントをたたみ装備をまとめて約三〇分ほど登り、息を切らしながら硬い台地を懸命に整地し、取り敢えず隊員用エスパステント二張、装備食糧用中国製テント二張を設営し新C1が完成、登頂体制が出来あがった。夕食前測定値 心拍数 八四、SPO二 七五、体温 三七・二度。

八月十一日 晴。朝食前測定値 心拍数 六四、SPO二 七五、体温 三六・二度。AC建設に向う。もう通い慣れたモレーンを乗越し、氷河を横断にかかる。

トレースの上に新雪が積もり、やはり少しもぐり団子も相変わらずアイゼンの下にくっついて歩き難くしんどい。氷河上にザックごと倒れ込む様にして休むと、空はあくまでも青く、頭を廻すと氷河は上流で大きく南へ広がっている。氷河左岸は切り立った岩壁が取り巻いており、その頂上部は尖がった岩峰が

続いている。しばし景色に見とれているうちに、また登高意欲が湧いてくる。七日のデボ地点に到着し新雪の下から装備を取り出し、銘々に分けて担いで先を急ぎ氷河横断を完了し右岸に渡る。真つ白に見えていたルンゼの取付きは完全に雪が消えており、細長く割れた屋根瓦を敷き詰めたような傾斜の緩い広い谷になっていて、アイゼンを履いての歩行に苦勞する。この谷を二十分ほど登ると傾斜三十度ほどの雪の斜面が始まる。雪は柔らかく最大膝下ぐらいのラッセルとなるが、雪の状態は安定している。大きく腹式呼吸をしながら、只々懸命に登る。高度差約二百メートルを上り切り、先日目を付けておいた黒い岩尾根のテラスに上がる。高度計は六一〇〇メートルを指している。岩屑も一部露出しているが、雪を切り広げれば十分テントを張る事が出来る目途がついたので、テントなど荷揚げ装備をデボする。午後三時ころを過ぎると毎回鉛色の雲と黒雲を墨流しにしたような怪しい空模様になり、激しくはないが風雪となる。今日は西北方向から雷雲がかなり早いスピードでこちらへ向ってくるのが、気にかかっていた。京大隊もアクサイチン湖の南東で雷に肝を冷やしているの、急いで下降にかかる。喘ぎ々々苦勞して登ったルンゼも、下るとなると案外簡単に降りてしまふ。反って傾斜の緩い氷河の歩行の方がなかなかはかどらず、疲れがドツと出てくる。視界も急速に利かなくなる中を、赤旗を忠実に辿って新C1に帰った時には、もうB隊の四名が上がってきて

いた。

夕食後、このところの天気、アタックの体制について話し合う。A隊が氷河横断を指した七日の午後と、B隊が荷揚げをした八日を除いて今まで好天が続いているが、今日の空模様からも、そういつまでも良い天気が続くとは考えにくい。中方によれば、この辺りの天気は四日周期といわれている。あまりゆっくり構えていると悪い周期に入ってしまう恐れがある。Bで決定した登頂計画では、十四日アタックとしていたが、予定を一日早めて明日ACに上がり、十三日にアタックするほうが良いと全員の意見が一致し、計画変更を決定した。後二日間どうか良い天気でいて下さいと祈りながらシュラフに潜り込んだ。

夕食後の測定値、心拍数 八八、SPO二 七二、体温 三七・五度。

八月十二日 晴後風雪。朝食前測定値 心拍数 八一、SPO二 七九、体温 三六・九度。体調に変わりはない。ACに泊まる個人装備を大急ぎでまとめる。なにせ重さが敵だから最小限に抑える。二週間も山行を続けているのでパッキングは流石にすばやく出来るが、シュラフやマット、防寒衣上下に目出帽、手袋のスペア、ヘッドランプに薬品、電池スペア、行動食、非常食にミネラルウォーターとかなりの嵩になる。それに共同装備を加えたザックの重みを感じ、A隊はゆっくりに通い慣れたモレーンの尾根をジグザグに登り出す。B隊は八日のデボを回収してA



8月13日15時40分 頂上はもう一踏ん張り
C1より高橋隊長が300ミリ望遠レンズで撮影

Cに向う予定である。重いザックにバランスを失いかけたりしながらモレーンの谷をトラバースして氷河に取付く。トレースの上に新雪が少し積もり足首ほどはもぐるが、トレースを辿り只ひたすら登る。日は燦爛と照り、風もほとんど無く喉が渇く。一ピッチ毎に氷河にぶつ倒れてミネラルウォーターをガブ飲みする。氷河を横断し岩屑の谷を登りルンゼに取付き、腰辺りのラッセルに喘ぎながら漸う々々AC地点についた頃には、空も鉛色に変わり何時もの風雪のお見舞いとなった。早速テントの設営にかかる。岩屑の所を避けて

雪面を均そうとするが、雪の下は硬い氷でピッケルを奮い、シャベルで削り奮闘する。六千メートルを越えた高所での土木作業はきつい。少しは傾斜しているが何とか五人用のスパスマキシムを張れるスペースができた。張り綱を張る段になりこの硬い氷ではベグが打てないのでと一瞬途惑ったが、細い楔のような専用ベグは、アイスバイルで打ち込むと小気味良く氷に食い込み、がっちり利いてくれた。昨年レイニア山の高度三千メートルの氷河上で四人が就寝中、強風でテントを一メートル近く持っていかれたことがあったが、これで少々風が吹いても安心して眠る事が出来る。

新C1を前後して出発したB隊は、かなりのアルバイトに消耗している模様で、三名はリタイヤールS君のみアタック参加となった。ACはテント二張を予定していたが、少し窮屈だが今張り終わった1張で我慢する。テントを減らすとEPEIストーブもガスもコップエルも、今上にある分で賄える。風雪も強まった中をS君は「もう少した！」の声援にも励まされACに到着、先着のメンバーの大歓迎を受ける。コフェルに雪をとり大急ぎでテントの中へ入る。完全装備の五人では確かに窮屈ではあるが、ストーブがうなり出すと、一気に温度も上がりほとと肩の力も抜けて外の風雪を忘れ天国になる。先ず水分補給に好みのコーヒーや紅茶を飲み、それから夕食にかかる。発達したフリーズドライ製品のお陰で、明日に備え

て具沢山のスープや、ご飯、好みのおかずと、皆食欲は旺盛で頼もしい。

夕食後の測定値、心拍数 八八、SPO二七二、体温 三七・五度。SPO二値が低いのが気に掛るが、昨日と同じなのでまあいいか、今日位動ければいいかと自分で自分を言い聞かす。更にお茶や大好評の「生姜湯」などで水分を充分に採り、大小の用事の為、テントの外へ出る。今日も又快調だ。

明日に備え早々とシユラフに潜り込む。明日は四時起床。いつもはバタン、キュウーの寝つきの良さを誇っているのだが、寝床が傾いて少し頭が下になっているのと、窮屈なのと、明日の不安とで少しゴソゴソしていた。他のメンバーはもう寝たのか静かだ。少し息苦しいような感じもしたので、起き上がり二三遍大きく深呼吸をしてから寝転んで又深呼吸をしている内に眠りに落ちたようだ。

頂上アタック

八月十三日 曇り後晴、後風雪。朝食前測定値心拍数 七九、SPO二 六九。

寒さから目が覚める。時計のライトを点けて見ると、四時十五分前。もう起きねばならないが、疲れからか高度の影響からか身体がだるい。もう一寸と目を閉じると、眠ってしまったようだ。Nさんの「起床！もう四時二十分だ」の大声に慌てて起き上がりシユラフを片付け、テントの吹出し口から雪を採って炊事にかかる。献立は調理時間が短く且つ腹持ちも良い餅入りラーメン。餅が大層うま

い。更に好みのお茶で水分補給をし、装備をまとめてテントを出る。皆随分急いだ積もりだったが、アイゼンを履き、ハーネスを着け、アンザイレンして歩き出したのは、七時にほんの少し前の六時五九分だった。やはりこれも高度の影響か？早朝は曇って視界が悪かったが、今では青空さえ覗いて来て、予定したルートもハッキリ確認出来、サーやるぞと気分が高揚する。田中、N組が先行しルート工作を担当、三名が続く。Nが先ずトツプで広い雪面のトラバースにかかる。雪質は心配していた過度に乾燥した崑崙の雪ではなく、昨晚積もった新雪も適度に湿った落ち着いた雪質で一安心。脹脛下あたりまでもぐるが、このルートで唯一気持ちの悪いルンゼを急いで通過し、横断地点に標識の赤旗を立てる。今日も又一番元気なNにこの係をお願いしている。ここからはスレート状の黒い岩の出ている比較的積雪の浅い部分を辿って、ジグザグに登高するが、やはり高度の影響がラッセルが伸びない。交代しながらだけ本峰の左肩寄りに 即ち向って右方向に 上がりたいとルートを探すが、そちらサイドは傾斜も強まり雪もぐんと深くなる。頂上へは遠くなるが傾斜も緩くなる左方向に登り、南西尾根に上がることにする。後続組のピッチが上がらないが何とか頑張り、十二時十五分漸う南西尾根上に上がった。高度六三二〇メートル。出発して五時間も経っているが一安心と、ザックの上に倒れ込

んで大休止、昼食とする。そこはテントが三張は張れるぐらいの広い平坦な鞍部であった。急な雪面の登攀が続いただけに開放感に浸る。ここから一つピークを越えればもう本峰の平坦な肩部分に着く。氷河の奥に連なる西崑崙の山々を遠望しながらの昼飯は、望むべくも無いほど豪華である。大気は乾燥しており、大きく口で呼吸するので、喉が乾く。食べやすいチューブに入ったジェルを一番に、その後でビスケット類を口にほうり込む。気温も高くプラスチック度あるのではないが中国製ミネラルウォーターがうまい。北側の谷 滾石河から吹き上げる風は青空をバツクに白い雲を次々と吹き上げている。西方 キャラバンしてきた新蔵公路の更に西方の山には、一昨日見たと同じ黒雲が湧き起こっており天気が急変しないか心配だ。下降時の為にここにも標識の赤旗を立てて、さあー出発。次のピークへの登りは傾斜はきついが尾根も広い。トツプを交代してKが北側に張り出している雪庇に注意し尾根を直登する。時々膝下辺りまでもぐるが腹こしらえが出来たので馬力を回復し元氣百倍、勇躍ピークを越えようと、もう一つ大きく雪庇が張り出した小ピークがあったが、右側をトラバースするとその先は広い平坦な雪の肩になっていて、真っ白な台形の頂上部がもう目の前に迫っている。高度六四七〇メートル。おお、来たぞー！やっと来たぞー！心配しているだろうC1に無線連絡すると、「こちらC

1、了解しました。こちらからも良く見えています。充分気を付けて行動して下さい」C1から皆心配しながら見守ってくれているのだ。隊長は三百ミリの望遠レンズをつけてわれわれを刻々とカメラに収めていたし、通訳のBはモンゴル遊牧民の持つて生まれた優秀な視力で、ウエアーの色まで判別し他の隊員に教えていたと言う。

しかし素晴らしい。南には崑崙の奥の優美な峰々がニヨキニヨキ平らな氷河から突き出している。仙台一校山岳会初登頂の六五〇メートル峰は？京大隊の六九三〇メートル峰はどれだろう。今まさに同時期に登っている早稲田隊のチョンムズターク峰は見えないものだろうかと目を凝らす。この年になって今崑崙のこんな高い所に立つて、この雪と氷の山々を眺められた事が信じられない程だ。さあー、行くぞー！純白の頂上ピークまで残り四、五〇メートル、もうそこだ。左は急峻で被ってくるように見え、下は切れ落ちているので右方向から登り切り、吊り尾根を北に辿れば最高点に着く筈だ。十四時五十分、標識を立ててNを先頭に田中がラストで、「もうちょいやー」と少し軽い気分で登り出すが、右へ行けば行くほどラッセルが深くなり進まない。これは目の錯覚だったかもしれない。もう直登しかない。ラッセルを替わって田中がトツプになりアイゼンを蹴り込み蹴り込み駆け上がるうとするが、息が続かない。三歩進んでは止まってハハハと腹式呼吸で息

れば雪の無い岩屑の尾根に突き当たる。その縁を辿ればACへの急なルンゼの登り口に至る。ACへ登り返す体力、気力が残っていない場合、そこは雪も消えた深い谷底で風も当たらないので、ピバークしてもいいと考えていた。それであんまり不安感は無かったが、薄暗くなる雪面のトレースを目を皿の様に探す。尾根の上に黄緑色の我がACテントが見えてきた時には、嗚呼、これでACへ帰りつけると正直のところホットした。最後の力を振り絞り大斜面をトラバースしACに着いたのは午後七時二十分、実に十二時間二十分余りの大アルバイトだった。取り敢えず心配を掛けているC1にACに全員無事着いた由報告し安心してもらった。よくも頑張れたものだ、登りに九時間半もかかり、三時間足らずで下った事になる。登りに時間が掛り過ぎではあるが、それは如何に苦しかったかを表わしている。テントに入り暖かいお茶を飲んで頭を垂れたままでしばし呆然としていた。しかし夕食ができる頃から又元気が戻って来て、全員食欲旺盛でフリーズドライの石狩鍋やフカヒレスープを白飯と一緒にきれいに平らげた。お茶を飲んで気分もリラックスし、さあ寝ようとベチャンとしてしまったマットに息を吹き込むと、マットがビーチボールのように真ん丸に膨らんでしまった。少し空気を抜いて試してみるが接着樹脂がいかれた様で丸いまままで、この上には寝る事が出来ない。しかも炊事

の熱で、テントの真ん中の氷が大きくへつこんでしまっている。仕方が無い、空気を殆ど抜いてしまえばその上に寝る事にする。昨日よりも又数段寝心地が悪いが、あとは下るだけだと目をつぶる。夜中には奥の高い位置に寝ているNさんが、重力には勝てずこちらへずり落ちてくる。お尻は落ち込むは、頭は下がっているのは寝苦しく、再三起き上がりラーゲを変えるが、快適な夜ではなかった。しかしよく登頂できたものだ。

夕食後の測定値、心拍数 九三、SPO二六七。

八月十四日 テントの前に並んでセルフタイマーで記念撮影してから、ゆつくりとACを撤収しC1泊、一五日 C1を撤収しBCに帰着し大祝賀会となる。食料係が密かに用意していた缶ビールが食卓に山型に積み上げられていて、それを掴んで次々に栓を開け祝宴は果てしなく続いた。現地旅行社の五人も自分のことのように喜んでくれている。キャラバンからC1への荷揚げ、撤収と良く協力してくれた。彼らの協力無しにはこの成功も無かつたのではないが、それ以上に、国内で厚かましくも後援をお願いし暖かく援助して頂いた方々、お世話になった方々への感謝の気持ちで一杯になった。

なお三名のテレビクルーが撮影した映像は二〇〇〇年十月十日、テレビ大阪にて「崑崙山脈未踏の六五〇〇メートル等峰初登頂、熟年隊の記録」として放映され、その

後再放送、また北陸、東北、関東地方の口ーカル局でも放映された。

西大嶺登山記(追記) 森本陸世氏との最後の山行

沖津 文雄

平成十二年二月十九日。あの山行では、天気が参加者の最大関心事項であった。簡単なルートとはいえ、山スキーは道なき道を進むのだから、天候の急変が大変危険なことは分かり切ったことである。とくにあの日は天気予報がよくなかった。

太平洋を進む低気圧の発達状況とその進行ルートに天気は左右され、正確な予測が付きにくい状況であった。もし低気圧が発達し寒気がそれに入ってくれば、首都圏さえも降雪の可能性があり、車で来たわれわれは東京に帰れないかも知れない、そのようなケースも森本陸世氏は心配していた。

気象協会の社員として、天気予報業務の第一線で働いている森本氏は天候にはとくに注意していた。天候を正しく予測し山行を無事終わらせることを、みずからの職業上の義務のように感じていたようだ。森本氏はその夜も、寝る前にはテレビの天気予報を熱心に見ていたし、翌日の朝も山には行かなかったのだが、チャンネルをまわし予報を熱心に見ていた。

私たち四名は、午前六時三十分東京駅

八重洲口で合流した。私と伊藤寿男氏は家が近いので、鎌倉の高速道路の入口で午前五時過ぎに待ち合わせた。森本氏と清水節郎氏は電車で東京駅まで来て合流する計画である。

伊藤氏の車に乗り高速道路に入ったのは夜明け前であったが、横浜を過ぎる頃から空は明け始め、上空は暗いがレインボーブリッジからは朝焼けに染まった東の空を見るようになった。予報によれば好天を期待できないよう天気ではあるが、この様子ではそれほど悪いものではなさそうだ。

森本氏の家から東京駅への便が悪く、六時三〇分より早く八重洲口に集合するのは困難とのことであった。森本氏は地下鉄で東京駅まで来て、キャスターつきの重いバッグを転がしスキーを担いで、長い地下道を歩いて丸の内側から八重洲口まで来た。大和市にある彼の家は高速道路に比較的近い所にあり、鎌倉を出たわれわれの車で森本氏の家まで出迎えるのはそれほどの手間ではなかったであろう。森本氏のその後を思うと、なぜそうしなかったのか悔やまれる。しかし、かれは若くて元氣、われわれにはそれが頭の中にこびりついていたようだ。

「あーしんどかった」

森本氏は少し遅れて待ち合わせ場所に現れた。清水氏は少し先に着いていたので、われわれはとどこうりなく出発した。休日の都心は閑散としており、神田の入口から高速道路に簡単に入ることができた。会津に

行く高速道路には、東北自動車道路經由と常磐自動車道路經由のルートがある。常磐ルートが渋滞しないだろうとの予測で、われわれは常磐ルートを選んだ。

上空は曇っているが、視界は悪くない。常磐高速から、日光男体山の見慣れた三角形の山容が遠望された。山に登れないほど悪い天気とはならないのではないか、会津はかなり北だから、低気圧の影響は吾妻連峰までには及ばないのではないか、などと希望的な観測を話しながら、われわれは常磐高速を北上した。

最初のサーブスエリア（守矢サーブスエリア？）で朝食。私と森本氏は納豆朝食、350円くらいであったか、を食べた。ここで運転手は伊藤氏から清水氏に交代。

早春の常磐高速沿線の風景は、上空を覆う灰色の雲のせいもあり、くすんだ灰色の大地とそのはるか後方に広がる山嶺が特徴的であった。わずかにこの平坦な大地を彩るのは、暗い緑色の杉木立である。杉林に近づくと、枝先は茶色く染められている。一面に杉花粉で覆われているのだ。花粉症が話題となった。

「おれ花粉症やね、それにこのところ風邪気味で調子悪いんね」

というような意味の森本氏の発言。森本氏が花粉症で風邪気味であることを、みんなが知った。

高速道路は空いていた。途中のパーキングエリアで森本氏の申し出で運転手は清水

氏からの森本氏に交代した。常磐高速は磐城までは海岸に平行して北上するが、そこから急角度で左に曲がり、阿武隈山中を横断して郡山に通ずる。海岸沿いでは全く見かけることのなかった雪が、山中の高速道路沿いに次第に増えてくる。郡山のジャンクションを過ぎて会津に向かうころには一面の雪景色となり、道路の脇に雪の壁が見れるほどになった。今年は雪が多いよつた、スキーには適している。われわれは心を躍らせ、先を急いだ。

順調に会津に着いた。高速道路を下りて目的の民宿に向かう途中のセブンイレブンで昼の弁当を買う。ここで運転者交代。あとわずかのところでの交代を、私はいぶかった。森本氏は伊藤氏に「頭が痛いから」とその理由を説明したらしいが、そのことを私が知ったのは後のことである。

民宿に着いてお昼ご飯。早々に身支度をしてグランデコ・スキー場へ。スキー場のリフト料金にはシニア料金があり、五十歳の森本氏もシニア料金を適用された。

「シニア扱いされたのは初めてや」と彼は喜んでいた。

ゴンドラに乗って上に。天気はだんだん好くなり、ゲレンデから紺碧の空をバックに西大嶺の頂上が見えるようになる。この日は足慣らしと覚悟し、頂上には目もくれず、スキーに専念した。何度か滑るが、おむね四名はグループで行動した。やはり森本氏が一番腕が良かった。彼が先頭を切

って滑っていた。明日に備えて、森本氏を先頭に深雪の樹林帯を何度が滑り抜けた。少し早いが足慣らしは四時で切り上げた。

一見調子の好い森本氏を見て安心するが、聞けば頭痛は続いているらしい。民宿に帰り風呂に入り、すこし歓談。私は賑やか過ぎる性格だから、騒ぎすぎて他の人に迷惑になつては悪いと思い、夕食前の小休止に昼寝を提案した。私の体験では、頭痛は少し眠ると治まることが多いので、森本君も眠れば直るだろうと思つた。

森本氏と私が同室。私は車の中で少し眠つたのでベッドに横になつても眠れなかつた。森本氏は眠つたようであつたので、私は静かに部屋を出て、民宿の建物の周辺を散歩した。その後食堂で何かを読んで時間を過ごしたように記憶している。

一時間程度時間をつぶし部屋へ。昼寝から目覚めた森本氏に調子を聞いたが、頭痛は治まらないらしい。そのうちに本多氏到着。夕食。夕食後伊藤・清水氏の部屋に全員集合、本多氏持参のワインなどを軽く飲む。それも早々に終わり、各自の部屋へ。森本氏は相変わらずテレビの天気予報番組を追っかけ、チャンネルを回していた。テレビに出演している気象解説者は殆どが森本氏の勤めている気象協会からの派遣者だそつだ。だから彼は放送の内情に詳しい。

「平日ならどのチャンネルは何時からと判つているのに、週末ではちよつと時間が違つよつや」

と森本氏の発言。それでも午後十時過ぎにわれわれは就寝した。私は寝てしまつと周囲のことは何も知らないタイプだから、夜中に何かあつたのか、あるいは森本氏がよく眠つたのかのどうかについては、何も知らない。

翌日は六時前後に起床。森本氏はテレビの天気予報に注視していたが、頭痛は治まらないとのこと。「山に行くのを止めて休養していれば」、どちらが言い出したのかはつきり覚えていないが、二人の話し合いでその様な結論となつた。

森本氏は彼の荷物から固形燃料と携帯コンロと鍋を取り出し、私に渡しその使い方を説明した。私はあるがたく受け取り、彼の好意に感謝してザックに入れた。

朝食はポリariumのあるおいしい食事であつた。全員旺盛に食べたが、話題も賑やかであつた。森本氏はデータ搬送方式について詳しく、今発売しようとしている新方式のテレビは、すぐに次の方式のものに取つて代わられるであろう、と朝食の席で熱弁を振るつた。(将来はケーブルテレビが席卷すると彼は主張していたようだ。)

森本氏が風邪薬があるかと民宿の主人に尋ね、民宿の主人から風邪薬をもらつて飲んだ。

食後森本氏と分かれ、われわれ四名(本多、伊藤、清水、沖津)は伊藤氏の車でゲレンデへ。これが森本氏との別れとなつた。

(平成十三年一月二十七日受理)

教育的登山論シリーズ

中島 道郎

第四章 山歩きの服装

今回は快適に山を歩くにはどういふ服装が良いか、というお話です。本稿はAACK会員が対象なので最初にお断りしておきますが、実はこれは故安田武氏のご高説を解説したものの、ま、早い話が、要するに受け売りということですよ。それをご了承下さい。

人が服を着る目的は「保温」である。体温を冷たい外気から遮断するのに一番有効な物質は空気であるが、空気は動くときも一緒に持つていつてしまふので、動かない空気を確保することが第一要件である。それには、空気を豊富に含んだ繊維で作つた衣服を重ね着するのが良い。すなわち、まず肌着、そしてその上に中衣(シャツ、スエーター)上衣(ジャケット)、最後に要すれば覆衣(ウインドヤッケ)、という三ないし四層の組合せを基本とする。この順序は決まつていて、最初に上衣、その上に肌着、ではうまくゆかない。安田氏はこれをlayered systemと称した。

ではその順序に従つて説明することにす

一 肌着

肌着を選ぶ決め手の根拠の最たるものは

着心地である。そしてその意味では断然木綿であるが、木綿は汗をよく吸って繊維間の空気を追い出し、保温効果が低下するので、寒い季節にはこれを肌着にするのは禁忌である。反対に保温効果の最も高いのは昔も今もウールである。ウールも汗をよく吸うが、ウール繊維の表面が水をはじき、表面張力で繊維と繊維の間に空気をたつぷり蓄えることが出来る上に繊維自体がその中に空気を含んでいるので、濡れても保温効果が下がらず、寒冷期の山歩きに肌着にはこれが最適である。しかし高価で洗濯が面倒で着心地が悪いのが欠点である。それに代わって最近では、ウールに近い保温効果を持ち、汗に殆ど濡れず、濡れてもすぐ乾き、洗濯が簡単で値段も手ごろな、ダクロン・オーロン・サーモダクチルなどと呼ばれる化学繊維製の肌着が一般的になってきた。一般に化学繊維製品の欠点は、水を吸わないことと、汚れやすいことである。これを肌着にすると、汗を吸わないから濡れないけれども、かいた汗は肌を伝って流れるので、非常に不愉快である。そこで、糸の形状や織り方に工夫を加え、汗を含みやすい、或は水蒸気としてすぐに外に出て行きやすい製品が次々と開発されてきた。他方汚れやすいという欠点は、洗濯が容易ですぐ乾くという長所で相殺され、もはやウールがベストとは言えなくなってきた。その意味で、それぞれの繊維の持つ長所短所をよく心得て着こなすことが大切である。

二・中・上衣

肌着の上にいわゆるスポーツシャツを重ねる。寒い季節にはウール製が最善だが、化学繊維製で十分である。シャツは身の回りの空気の動きを封じるためのものなので、目の詰んだ生地のもを、厚さは気温に応じて、選ぶ。必要ならその上にスエーターを重ねる。

寒冷期山歩き用のジャケットには、このところ保温力・軽量・経済性のいずれの点にも優れているとして、いわゆるフリース・ウエアが市場を席巻してしまった。嘗ての主役、軽くて着心地が良い羽毛服は、高価な割に濡れると保温力が極端に低下するという欠点のため、首位の座を降りた。フリースには保水性が全くなく、濡れてもすぐ乾くのが特徴なので、防水加工は不要、撥水加工のみで十分である。雨・雪の場合は次の覆衣を重ねる。

三・覆衣(防風衣、雨着)

防風衣すなわちウィントジャケット(アノラック)は、体の周りの暖かい空気が風を持っていかれないように身を包む衣服のことである。撥水加工を施したナイロン製の、目が詰んでいて、軽くて薄くて小さく畳めるものを選ぶ。覆衣といえは、誰しも防風・防水の兼用を考えるが、どっちかずよりは、防風に重点を置く方がよい。そして四季常に携帯し、風が出たらすぐに着用する。

雨着は夏の暑い季節には役に立たない。

汗が蒸発するのは、外気の水蒸気圧が体表面のそれより低い場合に限られる。夏の雨の場合は両者の水蒸気圧に殆ど差がない。従って汗は殆ど蒸発せず、その汗で肌は濡れてしまう。汗か雨か、いずれ濡れることに変りはない。雨着が多少役に立つのは、外気温の冷たい雨の場合に限られる。蛇足ながらその際、防水スポンを併用するようお勧めする。要するに山行には、雨が降ったらどっち道濡れるという前提で、肌着・上衣を選んで出かける。

防水材料としてのゴムやビニールは雨も汗も両方通さないので論外。ゴアテックスは『汗は通して雨は通さない』をウリにしているが、山で実際に使ってみると、『汗は通さず雨は通す』。登山の際の発汗量はゴアテックスの通汗能力を、そして山の激しい雨はその防水能力を遥かに上回っている。非常によく売れているそうであるが、ゴルフ程度の運動ならいざ知らず、山では値段ほどの効果はなく、過剰に期待してはならない。また、ポンチョは脇がないので蒸れにくいとされているが、裾が風にあおられたり、草や木の枝に絡まったりするので、山ではあまり勧められない。傘は風に弱く、木の枝に引っかかったりするので、これも山では論外。

結局、山では降られて当然、濡れて当然、だから常にビニール袋に『乾いた着替え』を用意し、一日の山行が終わったらすぐに着替える、という構えでいることが大切である。

四、靴

足の安全の確保にはいわゆる『登山靴』がベストである。これは英語のブーツ、すなわち足首を包む形の靴で、捻挫しにくいとされている。また軽登山靴とよばれるブーツもある。好みによるが、無雪期には軽で十分である。とにかく履きやすく足にピッタリした感じの靴を選ぶことである。散歩に毛が生えた程度の山歩きなら、足首を包まない（英語のシューズ）型の、いわゆるウオーキングシューズでも軽登山靴とあまり大差がない。

靴下は、ブーツの時は厚手のウール、シューズの場合はウールか化繊の厚手のハイエル靴下を履くこと。ウールや木綿の薄手の靴下はマメが出来易く、お勧めできない。

履き慣れない靴は勿論、慣れた靴でもマメはよく出来る。少しでも足に痛みを感じたら、面倒くさがらずにすぐ靴を脱ぎ、異物や靴下の皺などの原因を取除くこと。その痛む場所はイソジン液などで消毒し、ちよっと大きめに切った粘着力の強い布絆創膏を十分に、ガーゼは当てないで、貼ると宜しい。

森本陸世君の死に関連して、同行諸君への手紙

斎藤 惇生

森本グロンのアクシデントの件、御苦勞

さまでした。我々医者からみると、これは全く仕方のないことです。

くも膜下出血（脳動脈破裂による）はほとんどが晴天の霹靂のように起こります。最近、過労 高血圧 くも膜下出血 死亡の例が労災決定されました。急上昇した血圧のため、動脈瘤が破裂することはあるでしょう。

グロンがかげ気味、頭痛がすると訴えていたようで、これはたしかに何かの異変の前兆だったかも知れません。しかしこの時点で医師が診て、CTかMRIを撮っても診断できなかったでしょう。血管の異常を発見するには、最も正確なのは 脳血管造影、次に MRI血管写（MRI Angio）です。は危険を伴うので、Routineの検査ではありません。ではほぼ分かります。脳ドックでは、MRIとMRI Angioを撮ります。脳ドックも少し流行ってきましたが、まだ受ける人はそれほど多くありません。

一九八八年の中日ネ三国合同チヨモランマ交叉縦走の時、南側のBCで水越医師（脳外科）が夜中に突然死しました。カトマンスのトリバン大学医学部でJACC会員の病理専門の浜口医師が行って解剖し、くも膜下出血と分かりました。脳専門の医師でも自分に動脈瘤があることを自覚せず、症状もなかったのです。

蘇生法、本で読んで知っていても、その場では動転してなかなか実行できません。貴重な機会をグロンは我々に与えてくれた

と言えます。彼の異常が発見された時には、心停止・呼吸停止してから多分相当の時間が経っていたのではないかと思えます。救急で蘇生法が行われていますが、死者への最後のはなむけの処置になります。以前でしたら我々が診て心停止・呼吸停止・瞳孔散大があれば死亡を宣言して、特に処置はしませんでした。しかし最近は無駄と知りながらも、遺族に納得してもらうためにいろいろの処置をすることが多くなりました。山での緊急事態に備え、心肺蘇生法と救急処置を改めてしっかりと勉強しておいてください。

山で発生したアクシデントは、外傷・出血・骨折・内臓疾患（頭・胸・腹）すべて重症になればなるほど、止血・固定などの適切な救急処置をして、早く搬送して医師の手当を受けるようにするのが大原則です。発病したらその場で「絶対安静」とされた脳出血でも、すでに一九六〇年代には早期に病院へ搬送し、開頭手術などの処置をするようになっています。つまり「絶対安静」はもはや迷信でしょう。

ヘリコプターでピックアップできる場所、救急車へ積み込むことができる場所までは、最大、最善の努力をして搬送せねばなりません。もし搬送の途中で死亡するような例は、山中で絶対安静にして見守っていても死亡するに違いありません。搬送中最も注意して観察せねばならぬのは呼吸気道の確保です。救急法の本で気道確保の方法、人

工呼吸、心マツサージのやり方を再学習してください。(AACKで講習会をやりましようか。)

森本グロンのご冥福を心から祈るのみです。

(平成十三年八月受理)

京大山岳部の創世

藤平 正夫

京大には元来、山岳部はなく「旅行部」と呼ばれ、そのなかにスキー班やハイキング班などがあったらしい。詳しいことは、私は不明である。昭和十八年秋、私は経済学部へ入学した。

高原町の下宿屋には旧制富山高専山岳部の先輩、斉藤義則氏が下宿しており、彼は林学部学生であった。近所に私の義兄、南彬氏が下宿していた。彼も旧制富山高専山岳部の先輩で、よく一緒に山を歩いた人であった。

南氏と二人で斉藤氏に旅行部へ紹介していただくように頼むと、コンパに連れて行かれた。その席には有光二郎氏がおられたが、彼は同年春、斉藤氏と私の三人で立山の竜王東尾根を、ザイルを結んで登った仲間であった。斉藤氏はスキーの達人であった。彼ら仲間の話題はすべてスキー競技ばかりで、斉藤氏に聞くと、「山屋は旅行部にはいない、ハイキング組が鴨川の蚩狩りや

ったりしている」とのことであった。

私は憤然と立ち上がり、「来る場所を誤ったようです。いろいろパイオニア・ワークをした京大でないようです。私はこれで帰ります。」と席をけて退席した。楽友会館を出て近衛通りを二人で百万遍へと歩いていると、暗い中でもう一人ならんでいて、「全く同感だ、京大おとろえたり」と話しかけてきた。これが伊藤洋平君であった。

終戦の秋復学して、百万遍の西部講堂内に「スキー山岳部員募集」のプラがあり、旧旅行部室を覗いたのが、舟橋明賢君との出会いであった。そのあとは、彼のリポートにあるのが大筋である。この時は林一彦君と二人で剣岳八峰の上半を登ってすぐ京都へ来たので、真っ黒の顔を見て舟橋明賢君はびっくりしたことであろう。

(平成十二年八月受理)

京大山岳部時代を思いでのままに

舟橋 明賢

昭和二十年八月、旅行部のルームを尋ね当てる入ると、学生が独り本を読んでいた。成蹊高校から経済学部に入った橋本(ハシケン)であった。やがて、池田、伊藤、藤平、林、脇坂が現れるが、なぜか三高山岳部の卒業生は現れなかった。その後立平、川口、岡本、今園などが加わる。

(藤平による注、以下同じ) その後、藤平、

舟橋、林が木原先生宅訪問。細野氏へのコタクトをすすめられた。細野氏は具体的な話しなし。三高の鈴木信さんにも会う。具体的な話しなし。)

常連の殆どが高校以前から山を登り、旧制高校山岳部ではリーダーかサブリーダーをしており、言わば一国一城の主とも言うべき、実力も誇りも高い連中であった。特に伊藤は屏風岩、藤平は東大谷の初登で知られており、その他の山歴やヒマラヤについての知識の深さや傾倒の強さでは、他から抜きん出ていることが間もなく判った。

ルームには暫くの間、剣道場での対抗試合で主将同士が初めて竹刀を交える時に、相手の力量を測り、値踏みしあうようなぎこちない雰囲気が見え、それが緩み、次いで互いを理解し合い、信頼に値すると認め合うに至るのは幾つかの山行、即ち、近郊の岩のぼりや低山行き・京大ヒュッテの調査・谷川合宿・初冬の奥穂高滝谷・春の池の谷などを共にしてから後のこととなる。

そして、このような相互理解と容認の雪解けが進むにつれて、ルームでの日毎の談論の中心はヒマラヤ遠征という見果てぬ夢を逐って果てることなく、やがてAACKの先輩達の訪問を契機に、何時の日にかの実現を目指しての旅行部からスキー部と山岳部への移行へと動き始める。移行の段階で橋本(ハシケン)はスキー部に移り、この時がハシケンとの別れであった。

(山岳組は独自組織を決意、学友会の認

可をとる。スキー山岳班崩壊。スキー組はスキー部を作り、志賀ヒュッテが自動的にスキー部に所属する。）

（洋平は今西（錦司）・梅棹ラインと接触し、洋平の提案で夏休みにカナディア・ロッキーを計画。百万遍で舟橋、藤平、林、洋平が梅棹さんと会議。）

（関西岳連の会合あり、「現在の連中は初心者同然」との諏訪多栄蔵さんの発言に激怒し、洋平と藤平二人でぼろくそにけなした帰路、今西寿雄さんに誘われビールを飲む。洋平は「この人を中心にすえよう」と提言、その実現を図った。）

私の京大学生の期間は二十年八月から二十二年八月までの二年間の短い年月であったが、新しい友に出会い、語り合い、共に山に登り、木原、今西、西堀、梅棹さん等の強烈な個性に接し、また岳人の創刊に関わり合い、春の剣岳主稜縦走計画のための資金稼ぎに山岳映画会を催すなど、極めて密度の濃い、多種多様な想い出に織り込まれている。

当時の京大の法文系の各学科には多数の復員学生が溢れかえっており、学生に数を減らす方便として、一年に一回の定期試験を春夏の二回とし、規定単位が全部取れば、在学期間の長短に拘わらず、学費納付と引き換えに卒業免状が貰える仕組みとなっていた。従って、色々の個人事情で一年間で卒業した者もいたのである。

（藤平は一年半位で卒業。藤平の下宿に、

洋平、舟橋、林が集いカンチエンジュンガ東稜をゼムギャップからのルート、カンチエンジュンガのギャングウェイからのルートを検討したりした。後者はエバンスの初登ルートであった。二つとも洋平の提案で、すばらしい着想であった。）

岳人は伊藤洋平の発議であり、池田孝蔵さん個人の資金提供で創刊されたが、原稿の種切れを補うためにルーム常連にも協力要請があり、私もヨーロッパ・アルプスのエギユ・デ・ミディのドイツ語で書かれた初登記録を突然渡されて、四苦八苦しながら翻訳した覚えがある。

資金稼ぎの山岳映画会は前後二回催したが、適当なフィルムを見つけ出し、借り出しに至る作業、観客動員数を予想し入場料を決め、その予想収入によって会場を探し出し、ポスターや入場券を作成する作業、全員が割り当てられた入場券の売りさばきと観客動員に血眼になって奔走したこと、などの苦労や興業成否についての不安を今更ながら想い出す。興業は幸いにして黒字に終わったが、興業収入に関わる税金の納付はうやむやのままに済ませてしまった。

この映画会の目玉は立教大学のナンダコット登頂の記録映画であったが、スポンサーであった毎日新聞から参加した竹節作太さんに繋ぎをつけて借り出すことに成功した。しかし占領軍のアメリカ軍政部の大阪にあった検閲部の審査が必要と判って検閲を受けてところ、頂上でかざした日章旗の

他、日の丸が出る箇所は全て切られてしまった。返却に行った時竹節作太さんが激怒され、面罵されて著しく個人信用を失った。信用を回復したのは、卒業の数年後に富士山で行われた関東・関西の旧制高校と大学山岳部の雪氷技術講習登山の時である。たまたま八合目付近で発生した滑落重傷者の担ぎ下ろしに、私がリーダーを務めていた、早稲田・明治・日大のリーダー級で構成されていた隊が当たり、その果敢で機敏な行動を間近で見ている感動したのが、たまたまそこに居合わせた竹節作太さんだったという因縁のおかげである。

在学中の山行では、初めて藤平と二人で行った丸池ヒュッテ及び笹ヶ峰ヒュッテの調査旅行、谷川岳合宿、初冬の穂高滝谷そして春の池の谷などの思い出が鮮明である。丸池ヒュッテ調査旅行では伊藤などと四人で4高山岳部の好意で寮に泊めて貰って歓待を受けた。ひどく汚い寮だったこと、くじ引きで丸池と笹ヶ峰に行く者を決めたこと、大学の費用で混浴の温泉宿に泊まれたこと、桜桃畑の木樹がたわわに実った真っ赤な実でたわわんでいたことが記憶に残っている。

（四高山岳部には藤平の知人多く、泊めて貰ったが主食はサツマイモであった。）

谷川岳ではカタズミ岩のアルファールンゼをどしゃぶりの雨に叩かれながら登った。雨粒と岩屑に打たれながら登った岩溝のどんずまりにオーバーハング気味の庇が

あり、手がかり足がかりを探って躊躇している私たちに業を煮やした林が、私の体を踏み台にして上の手がかりに飛びついたことを想い出す。登るのを止めて下で眺めていたハシケンが吹き鳴らすトランペットの唳々とした音色が、風雨について長い間聞こえていた。

初冬の滝谷は穂高小屋に最も近いルンゼの途中までの下りと登りだった。急傾斜の逆層の一枚岩の上に薄い氷が氷結していて、何とも言えぬ恐ろしさだったことを、鮮明に想い出す。前の晩遅く穂高小屋に辿り着いた時は殆ど全員が疲労の極にあり、倒れ込んだまま動くのも苦痛な状態だった。伊藤が急いで濃い砂糖湯を作って飲ませてくれた。背筋をズーンと突き抜けて体中にしみ渡るような強烈な感覚があり、一挙に疲労が回復していったことを想い出す。

そして、春の池の谷は京大山岳部時代の忘れることの出来ないハイライトであった。池の谷の時、三高山岳部から借りたテントや装備については、実に覚えが無いだけに何とも言えない無念さが未だに残っている。これもいずれば時間の経過の間に風化して消えていくだろう。

(春の池の谷では、池の谷右俣を登る。帰路にはぶなから谷から猫又岳を往復した。これ以外に、藤平が大学院一年で退学し、北陸銀行に就職し福井勤務の時、三月の鹿島槍天狗尾根に林、毛利などの現役と共に挑む。しかし悪天候のため、小屋岩までも

到着できなかった。)

私が京大山岳部時代に得たものは多く貴重なものであったことは言うまでもないことです。しかし私が卒業以後の京大山岳部に何か残したものがあつたのかについては、全く判らないというのが本音です。むしろ、林、脇坂、池田、川口、岡本などの方が京大山岳部の根幹や基盤作りに功が多いのではないのでしょうか。

(平成十二年八月受理)

山岳部に入った頃

川口 章

私が大学に入ったのは終戦の翌年昭和二十一年。まだ京都帝国大学の名称が残っていた。当時は戦後の物資不足食糧難地代、大学に入ったが日々の生活は色々大変であった。電力不足で夜になると電圧降下で照明が暗くなり、学期末の試験に大学側が蠟燭の特別斡旋販売をするような状況であったが、工学部の講義はそんなことに関係無く淡々と行われていた。一年の夏、北海道に行き、大雪山系に登り、黒岳から旭岳まで縦走して北国の夏を楽しんだ。私は中学以来、山登りをやっていたが、おもに京都北山・丹波高原が行動範囲で藪山と沢登りが多かったので大雪の山々は大変印象的であった。

私の母校は京都二中(現在の鳥羽高校)

で、この学校は体育訓練が盛んで、戦時中は野外教練と称して、歩く事が多かった、その点、秀才型の京都一中とは対照的であった。毎年行事として比叡山へ登り、秋には大原の奥、小知谷まで歩いて植林作業をした。そんなことで北山に魅力を感じ、休日には良く出かけた。周山から由良川源流を遊行して京大演習林を経て小浜まで歩いたこともあつた。

そんなことで、昭和二十二年山岳部に入った。当時のルームは西部構内であつてスキー部と合同で雑多なものが積んであつた。大きな立て鏡があつたが弓道部の遺品で高さ二メートルもあり立派なものであつた。この鏡を売って山行きの資金にしようかと、皆で真剣に考えたが、惜しくも年末の火事で焼失してしまつた、鏡はともかく、旅行部以来の貴重な装備や書籍も無くなつたのは残念なことであつた。

当時の新入生は岡本と安田(故人)と私の三人、山岳部創設から間も無い頃で、池田、藤平、舟橋、林の面々が集まつて色々議論していた。三高山岳部との確執があり、先輩の尻について鈴木(信)宅へ行つたりしたが、新人の私には良く判らないことが多かった。当時の山岳部のメンバーは、池田、藤平、舟橋、林、のベテランと橋本、毛利、杉山(京大医専)、それに新人の岡本、安田、川口が加わつた。その他に今園と古田という哲学科の男が時々ルームに顔を出していた。

最初の夏合宿は、谷川岳に決まった。成蹊出身の橋本の計らいで成蹊の山小屋（虹芝寮）を利用する計画である。夏の合宿には穂高が剣に行くのだろうと思っていたので何故わざわざ二千メートル級の谷川岳に行くのかと思つたが、池田が熱弁をふるつて、谷川の岩場の凄さと、登山訓練の意義を訴えたので、これは、えらい処へ連れていかれると思つた。参加者は舟橋（リーダー）、林、橋本、杉山、岡本、今園、川口となつた。

当時、京都から谷川岳まで行くのは大変だった。夜行列車で東京に行き、高崎まで行ったものの、列車の便が悪く、土合の駅に着いた時は、もうは夕暮れであつた。湯檜曾川に沿つて歩き出したが、暗くなつてさっぱり見当がつかず、一の倉の出会いでビバークする羽目になつてしまつた。翌朝早く虹芝寮に着いたので皆が驚いていた。虹芝寮は中々良い山小屋で京大の貸切であつた。

小屋を基地に舟橋、林両先輩に連れられて一の倉、幽ノ沢と連日谷川岳の岩壁を覗きに行つたが、壮絶な岩壁に度肝を抜かれとても取り付け無かつた。それでもマチガ沢ではルートを選んで完登し稜線からトマの耳に登つた。

合宿の終りの頃、尾根越しに芝倉沢へ下つてみようという事になった。小雨の中、小屋を後に小刻みに岩場を登り稜線を越えるはずだったが、方向を間違えたのか堅炭

岩の岩壁に突き当たつてしまつた。暗い洞窟のある憂鬱な岩壁で、洞窟の横に湿つたルンゼが稜線に続いてた。これを登らないと上部には出られそうも無い。ルンゼの取り付き口に一本の古いハーケンが打ち込まれてあつたが、そこに取り着くには足場が悪すぎる、今から引き返すのも残念だと思つてみると、林が挑戦することになつた。ザイルを巻いてハンマーを腰につけると、舟橋の肩を足場にして、身軽くヒョイと岩壁に飛び着きハーケンを一本打つと雨の中、ルンゼをよじ登つて行つた。私は舌を巻いて見ているだけだったが、その身軽さには感服した。雨中のルンゼは恐ろしかったがザイルを頼りに辛うじて登りきつた、上では先に登つた岡本が形ばかりの確保をしていたが、足場の悪い所で確保とこでなく、まともにザイルにぶら下がればイチコロであつた。後で聞いたところでは、このルートは名にし負う難場で何回か遭難が起つている。小屋で留守居の橋本が我々の進路を心配して、危険な個所に行かないよう、しきりにラツパを吹いて阻止しようとしたのだが、我々は激励の進軍ラツパと思ひ込んでいた。

谷川岳の合宿で山岳部の体制も一段と固まり、冬山には後立山脈をやるうと計画を練つた。ルームが焼失したので、相談は専ら進々堂を利用したが、北白川の近藤ミルクホールに行くこともあつた。

昭和二十三年の三月に鹿島鎗岳に挑戦す

ることになつた。リーダーは林、藤平が就職先の銀行から特別参加し、メンパーは、毛利、杉山、岡本、安田、川口の計七名とままつた。登山ルートは天狗尾根を選び、天狗の鼻の下にベースを設営して頂上アタククをする計画で、ベースには白頭山遠征時のポラ型天幕を使うことにして（修理に出していたので火災を免れた）別にアタクク用に小型テントを松高の山岳部より借りる手配をした。

問題は燃料で当時ガソリンは手に入らないし、灯油も貴重品であつたので、林の提案でオガクス用のストーブを持つて行くことになり、林が親元に連絡して京都まで送つてもらつた。大系線の駅まで客車手荷物便で送ることにして、私が自転車で載せて京都駅まで持つて行く役になつた。荷札に行き先の住所を記入する必要があるの、なんと書くか迷つたが「白馬村鹿島鎗岳アラ沢三丁目京大山岳部基地」と書いて駅留め扱いにしたが、結局このストーブは重くて登山には無理と云うことになり、下山時まで駅留めにしたままであつた。「配達付き」にしておけばベースまで運んで呉れたのだろうか。

食料準備も大変で、米が乏しく炊事も大変なので乾パンを調達することになり、松本のパン屋に小麦粉を持ち込み、焼いてもらうことにした。この役も私が引き受け、松本に着いてからは松本高校へ行つたり、パン屋に行くやら忙しかつた。

鹿島部落で一泊、そば粉を沢山仕入れて、主食の代用にするようになった。

そんな事で装備が多く、特にポーラ型テントは重くグラウンドシートと別けて二名で担ぎ、支柱は皆で分担して運んだ。鹿島川からアラ沢に入り天狗尾根を目指して登り出したが雪が多くラッセルに苦勞した、天候は余り良く無く小雪が舞っていた。天狗の鼻の手前での台地に基地を設営することになったが、積雪が深く、天幕を張るよりも、雪洞の方が良いと云うことになり、皆で掘り始め戦時中の防空壕を思い出すような立派な雪洞が出来上がった。小型のテントは荷物置き場を使用することになった。折角のポーラ型を使わないのは残念だったが、雪洞の中は快適で蠟燭一本でも暖かく感じた。炊事用に小枝を集めて焚き火を始めたが、次第に大きな窪みが出来て良く燃え、ついには、太い幹もどんどん放り込んだので下山の頃には徑が七から八メートルの大穴がで上がった。

天候は悪くガスが深く行動が出来ず、三日三晩、焚き火を囲んで、だべり続けた。四日目にやっと晴れて視界も良くなったので頂上アタックを試みることになり岡本と安田が出発したが、余りにも雪が深く胸までのラッセルに耐え兼ねて引き返してきた。こんな次第で充分な結果を得ることなく下山したが、この春山合宿は想い出深いものとなった。

此の年、予ねて大学側と交渉していた笹

ヶ峰ヒュッテの移管が具体的に進展して、大学側が実地調査することになった。夏休みになって会計課長と事務官が現地を見に行くこと云うので私と岡本が付いて行く事になりことになった。

志賀高原のスキー部の小屋を見てから、田口に出て笹ヶ峰まで歩いた。ヒュッテは戦時中に放置してあったので屋根などかなり損傷していたが、宿泊するには充分で、白樺の林のなかに端麗な姿を見せていた。事務官が測地を始めたのでいろいろ手伝ったりした。此の時の調査で大学側から小屋の修理費が出ることになった。

折角来たのだから、私は暫くヒュッテに留まることになり一人で小屋の主となった。笹ヶ峰ヒュッテは既に学内に開放することに成っていたが、京大生はだれも来ず地元の人が笹ヶ峰にきてヒュッテを見に来た。

何時の間にか「よめさん」と云う小母さんが現れて、炊事をしてくれたり、洗濯をしましょうという。何も無い時は玄関前に座ってブツブツ呟いている。はじめは良く解らなかつたが、どうやら昔の学生さんは良かった、「コックさんを連れて来た事も有る」と云っているようだ。今西錦司さんの頃の豪華な生活振りを話しているのだが、貧乏学生の私にはどうもピンと来なかつた。

お手伝いのお礼が少なかつたのか、三日ほどしたら帰って行った。後で聞いたら故岡田長助さんの嫁で「岡長」は「龜」と共に先輩たちが親しんだ人だつた。

ヒュッテから少し離れたところに龜さんの小屋があつた。時々ヒュッテに現れて、懐から焼いたジャガイモをだして「今年のジャガイモは出来がわるい」といっては駄弁っていた。

笹ヶ峰に居る間に山に登るう思い、ある日、握り飯と水筒だけを持って火打山に向かつた。黒沢から高谷の池を経て火打山の頂上に着いたのは昼過ぎであつた。頂上から西の方に焼山がくっきり見えている。急に行きたくなつて時間も構わずに尾根筋を歩き出した。一時間ぐらいで行けると思ったが、焼山までは簡単では無かつた。やせ尾根を辿ると途中、キレットに出くわした。キレットの幅は一メートル足らずだが落ちたらそれまで、どうしようかと迷つたが思つたが、意を決して飛び越えた。胴抜けキレットを無事に越して焼山の頂上に着いた頃は、午後の陽射しも大分傾いていた。頂上火口には残雪があり火口壁に一本の錫杖が立ててあつた。予定外の登山のため帰りが遅くなつて、ヒュッテに帰りついた時は夜の十時を過ぎていた。翌朝、龜さんが来たが、昨夜は灯りが点かないので心配していたらしい。焼山に行つたと言つたら驚いていた。

笹ヶ峰の夏休みを最後に、私の学生生活も忙しくなつた。勉強のほうも疎かに出来ず、山行の活動も制約されたが、山岳部の日々は生涯忘れ得ぬ想い出である。

京大山岳部創立の頃

藤平、舟橋両先輩から二〇〇〇年九月九日に学士会館で、沖津編集委員が取材したのを纏めたものです。

第二次大戦末期の学内状況では、旅行部は殆ど活動していなかったようだ。藤平正夫は昭和十八年に入学したが、京都で登山することはなかった。

藤平は旧制富山高校の専科科に入学し、卒業まで山岳部に所属していた。富山高校では主に剣、立山を対象とした登山をシーズンにわたり活動していた。高校山岳部ではリーダーを努め、佐伯平蔵を山岳部のガイドとして使っていた。平成十二年二月に死去した林一彦は富山高校の後輩であり、高校時代には何度か共に山に登った。そして林も藤平に続いて京大にきた。藤平と林との親しい関係は登山のみにとどまらず、その後も林がなくなるまで続いた。

京大旅行部へ入部すべくトライもしたが、後述のような理由で入部しなかった。しかしその過程で伊藤洋平と偶然知り合い、戦後山岳部の結成の時には彼と協力しあった。

脇坂誠も富山高校の後輩であるが、高校在学中の彼については、何も知らない。京大の学生時代も彼とのつき合いはなく、脇坂が山岳部と関わり合うのは、藤平卒業後の事である。

舟橋明賢は京都に生まれ、京都三中に入

学した。父は京都出身であり、三中、三高、京大を卒業している。学習院高校に入学したが、旅行部の先輩である松方三郎、加藤泰安、周布光兼らの京大卒の先輩が学習院に来て山の「イロハ」の伝授のみでなく、今西教も布教していた。学習院には三高・京大の底流が流れていた。これらの先輩の扇動で舟橋も「Manishi Schuler」の学徒となるのである。高校時代は戦争中で登山者も少なかったが、少人数ながら冬山もやっていた。春のシーズンには穂高に籠もったりもした。

学徒動員のため国策として高校は期間が短縮され、くりあげ卒業となった。昭和二十一年に高校を卒業し、京大に願書を提出し、受理されたが直ちに休学となり、動員され福井の砂丘で飛行訓練を受けていた。終戦で除隊となり、とりあえず入学確認のために京都を訪れた。

昭和二十年八月頃であろう、舟橋が京大旅行部のルームを訪ねたのはこのような時であった。しかし、当時は部としての活動はなかった。この年の秋、百万遍の西部講堂に「スキー山岳部員募集」のピラが張られた。これを見て旧旅行部のルームを訪れた藤平は、ここで舟橋にはじめて会った。だれがスキー山岳部員募集の主導者なのか、今となってはよく判らない。藤平の記憶では、それ以前に旅行部は存在はしていたようだが、スキー派が主流の集まりであつたらしい。

昭和二十年秋から、登山グループを作る動きは活発化した。志を同じくする者が集まり始めた。この時期には今西、梅棹などの先駆者は未だ外地から帰ってきておらず（抑留されていた）、京都在住の木原均、鈴木信などが相談相手であった。

昭和二十年末から翌年年初に藤平と林は富士山に、さらに二十一年春には剣の八峰に登ったが、これらの登山は高校OBとしての個人的な山行であった。

京大山岳部が形をなし、はじめて行った本格的な合宿は昭和二十二年夏の谷川岳合宿であった。谷川合宿には、舟橋、林、さらに新人として川口章、岡本克美などが参加した。此の合宿で山岳部は、確固たる部としての基礎を築いたのである。

昭和二十二年春には、藤平たちが池の谷に登ったが、これはその困難さからも今も語り継がれる山行となっている。

理事会決議録

日時 平成十三年五月二十日(日)

午後一時～午後二時三十分

場所 京都市左京区吉田河原町 京大会場
出席理事 上尾庄一郎、田中二郎、岩瀬時郎、新井浩、西山孝、横山宏太郎、牛田一成、吹田啓一郎、山田和人、竹田晋也 以上一〇名

委任状によるもの 上田豊、松林公蔵、清

水浩 以上三名

欠席理事 原田道雄、松沢哲郎 以上二名
議事の経過および結果

会長上尾庄一郎が議長となり、「本日の出席者は定款第二一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案 平成十二年度事業報告について

理事吹田啓一郎によって作成された平成十二年度事業報告について逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成十二年度収支決算について

理事竹田晋也によって作成された平成十二年度収支決算について逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案 役員改選について

議長より任期満了に伴う本会役員改選について、下記の通り改選案が提出され、審議の結果満場一致で承認した。選任された役員は下記の通りである。

理事 上尾庄一郎（会長）、田中二郎（副会長）、岩瀬時郎（副会長）、西山孝、福脇義宏、上田豊、横山宏太郎、松沢哲郎、松林公蔵、牛田一成、人見五郎、吹田啓一郎、山田和人、高尾文雄、竹田晋也、清水浩 以上十七名

監事 平井一正、伊藤宏範 以上二名

議長より「本日の社団法人京都大学学士山岳会理事会の議事は以上をもって終了したので、議事の経過は議事録にまとめ、その末尾に議長ならびに理事二名が署名捺印すること」として閉会を宣言した。

総会決議録

日時 平成十三年五月二十日（日）

自午後三時

場所 京都市左京区吉田河原町〇

京大会館

会員の総数 二九〇名、出席者数 一七七名（うち委任状出席 一三九名）

議長 上尾庄一郎

上記のとおり定款所定数の出席があり本会は適法に成立したので理事（会長）上尾庄一郎が定款の規定により議長となり、議事録署名人に西山孝、吹田啓一郎の両名を選出した後、下記議案の審議に入る。

第一号議案 平成十二年度事業報告および収支決算について

担当の者より平成十二年度事業報告および収支決算について報告があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認可決した。

第二号議案 平成十三年事業計画および

収支予算について

議長は原案について担当者に説明を行わせ、これを議場に諮ったところ、満場一致で原案どおり承認可決した。

第三号議案 役員改選の件

議長は理事および監事の任期が平成十三年五月二十八日をもって満了するので、あらかじめその後任者を本総会において選任したき旨を告げ、その方法を諮ったところ、議長より議長の指名に一任したき旨の動議があり、満場これに賛成したので議長は次の者を選任する旨報告し、満場異議無く決定した。

理事および監事の氏名は次のとおり。

理事 上尾庄一郎（会長）、田中二郎（副会長）、岩瀬時郎（副会長）、西山孝、福脇義宏、上田豊、横山宏太郎、松沢哲郎、松林公蔵、牛田一成、人見五郎、吹田啓一郎、山田和人、高尾文雄、竹田晋也、清水浩 以上十七名

監事 平井一正、伊藤宏範 以上二名

第四号議案 新入会員について

担当の者より本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認可決した。新会員の氏名は次のとおり

有馬賢治

以上をもって議案全部の審議を終了したので午後五時三十分議長は閉会を宣し解散

した。上記の決議を明確にするため議長および議事録署名人が署名押印した。

会員住所

八月十九日（日）午前二時—八分逝去されましたので、お知らせいたします

著書紹介

「ヒマラヤ環境誌」

山本紀夫・稲村哲也 編著

本文・三三五ページ

八坂書房 四千五百円

沖津 文雄

サガルマータ（別名エベレスト）南部に位置するジュンベジ谷を中心に三年間にわたる学術調査の成果をまとめた興味深い著作である。

ネパールといえばわれわれはまずネパールヒマラヤを思い浮かべるであろうが、ヒマラヤはそのほんの一部であり、ヒマラヤ山麓から低地に広がる地域に住む住民たちの日常の生活を、本書は具体的に我々に伝えている。山のみでないネパール、いやむしろ本当のネパールを伝えてくれる著作である。

もはやネパールにさえ手つかずの自然はほとんど残っていないらしい。彼らも伝統のみに縛られて生活しているのではない。開発などによる環境の変化と共に日々変化している彼らの生活が、著者たちの克明な調査と記述により立体的に読者に伝わってくる。

かつて天然の要害であったタライにも森林はほとんどなく、今では見渡す限りの豊かな穀倉地帯となっていること。二十年ほど前に起こったネパールの食卓革命によりジャガイモを主食とする豊かな食生活が確保されたこと、セルパ族にも、旅行会社や航空会社を経営し、ロツジの運営などでビジネスマンとして大成功している一族が少なくないことなど、山登りでは知ることのできないネパールが克明に描写されているのである。

しかし率直なところ、本書は取り付きにくい本である。異なるテーマについて十一名の著者が分担執筆しているので、通常の読み物との比較は慎むべきではあるう。しかし、ネパールという屋台を広げるためか、その冒頭の一章にやや性格の異なる内容のものを物々しく置いたので、この部分が難解でかなり読み辛い。説明にも疑問点がいくつかある。「断層は山脈を隆起させる原動力」と解説しているが、断層は隆起の結果ではないのか。この部分を付録として、末尾に添付したものとすれば、馴染みやすいものとなったことであろう。一章で本を閉じてしまった友人がいるのもこのためであろう。けれども各章は独立した内容になっており、どの章から読み始めても理解するうえで問題はない。読者には興味ある部分から読み始めることをお勧めする。

さらに読者を混乱させるのは、用語の不統一である。ジュンベジという名称が頻繁

計報

伊谷純一郎 享年七五歳

関係団体行事カレンダー（2001年）

日時	名称	付記
10月6日	今西錦司生誕百周年記念シンポジウム	13:00 進行 松沢哲郎 於 京都教育文化センター Tel.075-771-4221 入場無料 一般参加歓迎
10月7日	探検部OB会総会	於 京大総合博物館
10月6日～14日	笹ヶ峰ヒュッテ・秋の開放期間	受付開始：9月1日

に現れるが、ジュンベジ谷についてはその範囲がはっきりと地図に示されていない。ジュンベジ谷とは人が住んでいる範囲のみを指し、われわれの感覚では村というより

集落のようなものと思われるが、どうなのだろうか。目次におけるページ番号の誤記など装丁上の問題点もいくつか目に付いた。困難な環境に負けず、このような研究をなし遂げた研究者の情熱には敬服する。しかしその情熱で「今西錦司や梅棹忠夫ら、学問の巨人たちの着想の原点になったヒマラヤにきた。」と感動しても、これは事実と異なるのではないだろうか。
（カムチャツカ半島クリチエフスカヤ峰、四六八八メートルのアツタクキャンプに五日間滞在中この本を興味深く読みました。本文はテント仲間との意見交換も参考にしています。）

編集後記

私の最後の編集作業となりました。ページ数が多いのは、溜まっていた原稿を全て掲載した結果です。次号からは北村泰一氏が編集してください。会員皆様の北村氏へのご支援を、これまで編集に関わったものとして心からお願ひ申し上げます。

本号には初めて広告を掲載いたしました。皆様も多いにご利用ください。

編集を終えた時に伊谷純一郎氏の訃報を受け取りました。二年前にお会いしたときは、写真のように大変お元気でしたのに残念です。ご冥福をお祈りいたします。

沖津 文雄



編集委員 沖津文雄、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日 二〇〇一年八月二〇日

発行所 京都大学学士山岳会

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一 八

(株)土倉事務所

